異文化理解

オリエンタリズムの成立

その西南にあたるモロッコもイスラームの支配する その内実は場合によって伸び縮みする錯綜体をなす。 ジプト遠征(1七カ八年)以来、この曖昧な領域に関与する西欧の人びとが「オリエンタリスト」と呼ば 極東までもオリエント世界として把握される。西欧の南にあたるチュニジア、 アにいたる肥沃な三日月地帯に限定されるし、 オリエント」とは西欧(近代)人の世界観によって規定された「東方」という人為的地 フランス語では近東、中東、さらには中国、 「オリエント」に属する。 古代オリエントといえばエジプト おおよそナポ アルジェリアのみならず から 理認: レオ 日本を含む メソポ 識 ンのエ であり、 タミ

れてきた。

一九世紀にはそこに主として二つの分野が認められた。

つはオリエン

1

の風物を描い

た西欧人画家たちで、

ナポレオ

ンのエジプト遠征

の事蹟

を描

いたグ

U

や古代オリエ

をそのはじめとするのが定説だ。ついでギリシア独立戦争に取材した《キオス島の虐殺》

Ⅲ-5 オリエンタリズム論---異文化理解の限界と可能性



J.- L. ジェローム《囚人》(1863年サロン出品作、ナント美術館蔵) 悠久のエジプトを舞台とする豪奢と隠謀と残虐の絵巻。オリエンタリズム絵画に結晶した東洋像は現代の娯楽大作映画にいたるステレオタイプの原型を提供する。

1985]° 行 関の発達(スエズ運河開通一八六九年)などを背景に 争一八二一~二九) やイギリスのインド統治、 は、 ル る に描いて絶大な人気を博したジェロ ル。 ルコ風呂》 を持ち帰ったドラクロワ。 などを描いた後、 ァルにいたる多くの文学者に霊感を与えた〔Berchet ント史に題材をとった 東方趣味」 『ミカド』、プッチーニ『蝶々夫人』などの極東もの 、サレム巡礼、遠くはインド旅行にいたる東方旅! いたる音楽の異国 もう一方のオリエンタリストとはオリエントを専 阿部 イロン、 さらには虚実こもごものオリエントを「真迫」 オスマン・トルコ帝国の弱体化(ギリシア独立 サンサーンスをはじめとして、 九世紀前半のロマン主義の潮流もあいま 一九九○]。近くはギリシア訪問から聖地 など想像上の夢幻的世界を描いたアング と呼ぶ。 サッカレーからフローベ 実際に北アフリカを旅行して写生 趣味もある。これらを一般に 《サルダナパロス王の最期》 また 《オダリスク》、 ームなどにいた ール、 サリヴァン ネル 交通 ヴ 流 0 工

0 するとともに、 年にはサンスクリットが欧米の諸言語と血縁関係をもつとの仮説を提起して、失われた印欧祖語 ザビエルの訪れた黄金の国ジパングこそキリスト教の遍在を証しする極東の隠された鍵と解釈してい 的で詩的な古代がアジアの奥からたち現れつつある」と述べる。世界の果てに隠されてあるはずの真理 くる。『諸宗教の精髄』(一八四一年) の著者エドガール・キネは「ギリシアやローマよりもいっそう哲学 元的に把握しつくそうとする学問意欲が、東方趣味の根底には潜んでいた。 んだが、最近ではオリエンタリストと呼ばれる」と書いているが、 [彌永 探究は [Schwab 1950]° 一九八七]。また一七八四年にベンガル・アジア協会を設立したウィリアム・ジョー ヨーロッパ神秘主義の底流をなし、 アラビア、ペルシア、インド、シナ、日本などが新たな研究対象として浮かび上がって このような究極の真理、 普遍の源泉への渇望ないし夢想に裏打ちされ、 すでにルネサンス期にたとえばギヨーム 西欧における学問 知 識 ポ の視 ンズは、 ステル 野が を措定

オリエンタリズムの政治性

究は、 地支配と結託し、それを正当化し、そのお先棒をかつぐ役割をも担った。ただしそれは単に政策・行政 る学術調査記録の集積が、 だが世界の 軍事 西欧の世界進出と呼応してその領域を広げていったが、また同時にその学問的成果は容易に植民 土木 秘密 小測量、 0 鍵を手にすることは、 運輸・通信技術といった領域に限定されるものではない。 無意識のまま、 世界の覇権を握ることでもある。 知の世界における世界制覇に貢献してしまう。 オリエンタリストたちの研 む しろ一見中立にみえ オリエント世

門とする学者を指す。『東方詩集』(一八二九年)を出版したユーゴーは「かつてはギリシア古典学者と呼

してオリエントに関する学問の主体たる権利を剝奪されてしまう。 閉じ込め、 的手続きに則り、専門的議論によって承認された成果のみに限定されることとなる。オリエントはかく 「対象」へと格下げされる。そして、オリエントに関する「科学的」な貢献とは、 それに呼応して、 て、西欧は 界からサンプルを抽出・蒐集し、 ては「発掘」、「文物招来」という名の「学問的貢献」へと変貌する知的風土がある。 その結果、西欧は非西欧世界に関する由緒正しい情報の独占的供給者の位置をもって任ずるにいたる。 一みずからの普遍主義へと取り込んでいく。その背後には現地における遺跡略奪が、 「オリエント」を西欧の認識論的な格子にそって解剖し、 非西欧世界は西欧の世界認識においてもっぱらその存在を受動的に承認されるだけの 回収・固定し、観察・分類する。昆虫採集さながらのこの作業によっ 西欧の学問によるこうした 剝製化してみずからの分類 あくまで西欧の学問 「オ 母国 リエ にお

゚オリエンタリズム』の知的背景と方法論

エドワード・サイードの著書『オリエンタリズム』[サイードー九八六]である。

ント篡奪」

――の陰に潜む不可視の政治性

を声高に弾劾したのが、パレスティナ出身の在米知識人

ずしも意見を等しくは 的風土における最近の二つの潮流がその背景にある。一つはそれまでの西欧中心主義に対する、一九六 〇年代以降のいわゆる「第三世界」の視点からする反論と自己主張である。先駆者としては、互い 「黒人」知識人を指摘できよう。それはアメリカ合衆国の公民権運動とも並行する。いま一つは もちろんこうした認識そのものをすべてサイードの しない が、 レ オポ i ル ・サンゴール、 独創に帰するわけには エメ・セゼール、 フランツ・ファノン くまい。

13

むしろ西欧の知

関係としてではなく―― を指摘するためにサイードがこの著書で依拠しているのがフーコーの『監獄の誕生』、『知の考古学』に 気」や「犯罪者」の隔離装置を介して、〈支配者〉と〈被支配者〉との間に――もはや現実の「暴力」 とでおのが秩序の内に組み入れ、手なずける機構である。不都合な対象を自分の都合で一方的に「暴 ある「理性」が自分の秩序とはあい容れぬ不都合な異物を「非理性的なもの」として排除し囲い込むこ くずされた。この両者の潮流がいやおうなく混ざり合った地点にサイードの問題意識も芽生えてくる。 信仰の打破などを通じて、旧来の学的認識そのものの「中立性」、「客観性」の根拠が問い直され、掘り 八年」の学生紛争における「異議申し立て」に代表されるような、学問的権威への疑義である。 力」と名づけ、 おける権力構造分析と、グラムシの「文化のヘゲモニー」論だ。そこに摘出されるのは、 政治と学問との間には、直接的依存ではないだけにかえって強固で不可視な構造的癒着がある。それ 〈暴力〉隠蔽装置はあらゆる権力に本質的な完全犯罪のトリックだが、それは西欧における「狂 構造主義、 排除する。この「暴力」排除の〈暴力〉によって当の〈暴力〉の暴力性は隠蔽され 精神分析学の流行、実証主義論争、あるいは科学基礎論・科学社会学による科学 - 言説のネットワークという象徴的次元で隅々まで張りめぐらされる。 単純にいえば、

言説としてのオリエンタリズム

て西欧読者むけに描くのが西欧の文人ならば、 の学会である。だがこの論法を経済の世界にもちこめば、オリエントは経済的篡奪の対象となり、また のネットワー クは、文学、学問的知識、 学問的知識の対象としてオリエントを取り扱うのも西欧 政治演説などを横断する。オリエントを文学の対象とし 異文化理解の限界と可能性 支配者の関係をなぞっているのがわかる。 この代理行為が、ひとたび(「国際秩序」なり「学問」なりの名で)公認されてしまえば、

認識

論的次元においても、

主義になる。そこに一貫してあるのは、オリエントはみずからを「表象=代表」できないから、われわ

政治」の世界にもちこめば、いかにオリエント世界を扱うかの決定権も西欧に存在する、という覇権

れ西欧が代わってオリエントを表象=代表してやろう、というすりかえの論理だ。

のオリエント観の根底に潜む。学的認識そのものが、こうして人知れず植民地政策における支配者と被

対象の口をあらかじめ封じ、その「代理を演ずる」行為主体の偽善性が西欧

政治的次元と同様に

もはやその公認

う。 えない、という意味での は、もはや「公権力」---在なればこそ根絶しがたく、あらかじめ「合法」だから敵対者を否応なく非合法となす。それゆえこれ テム全体に霧散させる無-責任体制だといえる。 の背後にあった政治的強権発動もまた不問に付され、不可視(すなわち隠蔽された〈暴力〉)になってしま かえれば一般に 〈政治〉とは、「合法性」の根拠を我知らず棚上げにしてその責任主体をシス 〈暴力〉を、「加害者」なきままに発揮する。 政治、 行政、司法 ――の舞台では糾弾も統制もできず、「暴力」とは認定し それはもはやその責任を問うべき主体が消去されて不 その限りでこれは一つの「文化

洋 トリカルな「東と西」の下に隠れているのは、 そ、右に素描した、支配 パ」というマックス・ヴェーバ のヘゲモニー」(グラムシ)なのである。 (東方)との、決して客観的でも同列・可逆でもない偏務的依存・寄生関係だ。「オリエント」とはだ アジア的停滞と無知」というマルクスの観念、「呪縛されたアジアと、呪縛から解放されたヨーロ /被支配を正当化する〈暴力〉 ーの観念。このような西洋/東洋の対比図式の背後に隠れ あくまで観察行為者たる西洋(西欧)と観察対象たる東 隠蔽の論理=機構ではなかったか。一

ていい

見シンメ

想像的にして政治的なカテゴリー」として把握され直さなければならない。 〈他者認識〉 の営みが「他者支配」の正当化へと隠微に接続されている、「存在論的にして地理学

う。 理・行政補助学としての「社会科学的オリエント」へ。この展開は、大枠においておおよそ納得されよ 実証科学信仰に根ざす「文献学的オリエント」から「帝国主義的オリエント」へ。そして今日の世界管 象としてのオリエント」から一九世紀前半のロマン主義的なオリエントへ、さらに一九世紀中葉からの した東方像とその働き――をサイードは「オリエンタリズム」と名づける。一八世紀百科全書的 リエンタリストたち相互の交換の中に浮かび上がる複合した言説――西欧 (とりわけ英、仏、米) の捏造 るか(つまり〈政治〉)の解析である。東方学者たちの学識と東方「政策」の推進者たち。この二つのオ ていかに両者が互い その逆に、いかに「権力機構」のあり方そのものがこの〈表象機構〉によって規定されているか、そし 「表象」のあり方がいかに「権力機構」によって規定されたか (つまり狭義の 「政治」)、というよりむしろ こうして問題となるのは、 、に無関係だといい張り合うまさにその関係によって、なぞり合い、依存し合ってい 一八世紀以来の西欧において、東方とりわけイスラーム圏、 アラブ世界の

政治性の隠蔽と暴露の政治性と

には根絶できない固定観念となる。そうした否定的「オリエント」像がいかに手前勝手に形成され、西 界像であればこそ、いかにも融通無碍な表象でありながら、かえって「真実」を突きつけられても容易 放縦で淫蕩、 退廃し停滞し、懶惰で横暴、無秩序で粗野なオリエント。それは西欧のネガとしての世

のである。次にそうした方法論の揺らぎと問題点とを整理しよう。 が、その際のサイードの論法も、彼の扱う「研究対象」に劣らず、 欧によるオリエント支配の正当化に格好の口実を与えたかを、 サイードは執拗に「暴露」 おそろしく融通無碍かつ手前勝手な していく。

は 才

異文化理解の限界と可能性 障害因となっている」と指摘する。そもそもサイードが検証した「オリエンタリズム」のごとく「現実 るタウヒード(一化の原理)やシャリーア(イスラーム法)の検討が中東研究において等閑に付されている 訴えることにあったのだろうか。たとえば本書への書評において黒田壽郎は、イスラーム理解 の不在を存在の基礎とするような学は、果たして真実の解明にいかなる寄与をなしうるであろうか」 リエントについての誤った言説・表象を打破して、イスラームの内在的理解や正しいアラブ世界認 まず問われるべきは、 一九八七]。イスラーム学の権威たる立場からなされた西欧の中東学への批判としては、 「奇妙な欠落」をみて、「オリエンタリズムの言説の虚構性が、この サイードの著作『オリエンタリズム』の「意図」であろう。はたしてそれ 地域の 現実の解明に大きな の核とな

要請するにいたって、その論点はサイードの著作に内在する「曖昧さ」をはからずも暴露することにな はたしかに妥当しよう。だが、ここで黒田が虚構ではない「実在のオリエント」を措定し、 その認知を

識 れている。 言説を掌握することが、そのまま言説の対象を支配する政治的「権力」へと媒介される機構であり、 というのもサイードの方法論で当然の前提となるのが、「虚構」 的 ?な疑義だからである。 『オリエンタリズム』において問題とされるのは、認識論的に とすれば、(西欧の手になる)言説・表象が「現実」の中東をいかに歪曲したかを指摘するこ 力 機構と表象との相互依存による相互規定、相互正当化の 対 「実在」とい 〈メカニズム〉こそが問 った区 別 に対 「真理」 する認

だそうとする考え方それ自体が、サイードの批判する実証科学の残滓 る「東洋人」なら当然所有できる、という筋合いのものでもない。そもそも、こうした「歪曲」の度合 ともと「客観的な事実」なるものは、「西欧人学者」の専有物でもなければ、だからといって当事者た とは、単にサイードの「意図」を越えるだけでなく、むしろそれを〈裏切る〉 いを測るための「客観的な事実」とか、偽の表象に対する「真の特権的表象」とかといったものをもち ――実定性 (positivity) の幻想 勇み足となるはずだ。

サイードの知識人としての位置

-に他ならないはずだからだ。

たく絡まり合っていて、それが本書にいわば毒ある魅力すら与えている。 あり、イスラエル当局のブラックリストにも載っている著者サイード自身の実存そのものともわかちが が、そうした「誤解」を招く種は、PLO議長アラファトの国連での政治演説の草稿を執筆したことも が、サイードの「批判の射程を見誤る」ものであることは鵜飼哲も指摘する通りだ [鵜飼 一九九一]。だ ナ人が加害者の論理である西欧「オリエンタリズム」を批判するのは当然、といった短絡した サイードにあっては渾然一体となり、収拾のつかぬ混線を呈している。むろん、被害者たるパレスティ それゆえに「真の表象」なるものをかつぎだす――実証主義への批判。この融合不可能なはずの両者が、 学者への断罪。他方で表象の「虚構性」(ないしより正確には、表象が真偽の彼方にあること)に無神経な すでにサイードの曖昧さは明らかだろう。一方で「事実」を抹殺し、歪曲し、濫用した政治家、 理解」

とサイードは再反論する。

いずれにせよ、

サイードによれば、

オリエンタリズム論争

質な詭弁を弄する。こうした瞞着を糊塗することこそ、帝国主義的意識との恥ずべき親和性の証拠だ、 ビア人やイスラームを慇懃無礼にも中傷し、また公然とシオニズムの政治的片棒担ぎをしながら、 の業績はそれとは無関係な純然たる学問的貢献である、などと良心的学者ぶった虚構の煙幕をはって悪 のように語る、 ちが実はイスラームに対する敵意とアラブの人びとに対する偏見に支えられた「陰謀」を抱 的寄与を、サイードはあたかもアラブ世界からの「略奪行為」であるかのごとくに歪曲し、文献学者た たくお話にならぬことを示そうとする。イスラーム文献学者の「真摯」で「誠実」な解明の努力と学問 者への敵意に満ちた動機に導かれた被害者妄想的な詮索に終始しており、「学問的水準」に スは、サイードの専門的知識の「欠落」、「誤謬」、「偏り」、「不正確さ」を指弾し、サイードの書物が学 本書に安易な告発書であるかの印象を与えた。その典型例が中東史研究の大御所と目されるバーナード ・ルイスとの論争である [ルイス -九八三]。オリエンタリズムを文献学的ディシプリンと規定する このように、 学問 とルイスは不快感を隠さない。そういうルイスは、公平無私な学問という口実で、 .的分析と政治的糾弾とを「混同」させた論争口調をとるサイードの性急さは、 おお いてい 11 てまっ ル

問題なのは「政治」と「学問」の結託など「立証不可能」だ 285

のか

から両者は無関係だとして却下し度外視する学者の態度なのであり、そうした政学分離こそが、

はたしてサイードは自分自身の学問的射程をあえて裏切るような自己撞着を意図的に犯している

せたサイードは、まさにそれゆえに〈政治〉を「政治」へと引き戻してしまったのである。 き問題の隠蔽なのだ。だが逆に両者の間に隠蔽された構造的共犯性(つまり〈政治〉)を「立証」してみ

「オリエンタリズム」批判の(戦術的?)短絡

意図であるかにみえる、 き」は中立で「客観的な学識」であるかのようにふるまっていながら、「実際には」、その「真意」とし によっては同一視し、といった、変幻自在なふるまいをみせる。つまり「オリエンタリズム」は オリエンタリズムにおける意図的政治性と無意識的共犯性との二重性を、場合によっては峻別し、 には還元されない形で)機能する場である。だがそのことを指摘した上でサイードは知ってか知らずか、 たのが、『幻想の東洋』の著者彌永信美である。すでにみた通り、「オリエンタリズム」として問 ては「政治的プロパガンダ」である、ということを露呈させようとしているのが、あたかもサイードの た表象の錯綜によって維持されると同時にそれらの表象をまかり通らせる〈権力〉が(しばしば「権力」 のは「支配権力」と認識論的秩序との錯綜体(つまり〈権力〉)としての言説編成体であり、またそうし サイードにおけるこうした方法論適用の自家中毒を、あくまでもテキストに内在して組織的に批判し と彌永は指摘する[彌永一九八八]。

て「政治権力」

したがってサイードは、表象としてのオリエントとその実証的裏づけの有効性/無効性に関する議論に

糾弾を目的とした二枚舌を弄していることをみずから「露呈」するに等しいことになる。

ード自身、「表向きは」あくまで〈権力〉分析であるかに装いながら、「実際には」その「真意」におい このように表向きの建て前の下に潜む本音を「暴露」してみせるサイードの論法が許されるなら、サイ

286

結果サイードは「歴史を残忍な加害者と悲惨な被害者が繰り展げる崇高悲劇」に還元してしまいかねな は必要なはずの理念的区分においても、 げる歴史のからくりを可能な限り理解すること」ではないか、 ても、 むしろ大切なのは また支配/被支配の図式においても、 「一方を「抑圧者」という記号に、 いずれもみずからの仕掛けた罠にはまっているに等しい。その さらには 「政治」と〈政治〉 と彌永は提案する [彌永 一九八八]。 他方を「抵抗者」という記号に仕立て との間に作業仮説として

『オリエンタリズム』の排除したもの

生谷 | 九八七]。オリエントに「西欧に対する非西欧」という対立項の役割を授け、そうすることでオリ 西欧の真理への意志たる「知」とは「歴史」において現象するものであるから、インダス河以東の 亡の「歴史」には組み込まれず、 西欧が西欧たるための下部構造となり、歴史の弁証法的過程の中に否定的にまきこまれる。オリエント の古代帝国はその滅亡によって西欧世界の自立に貢献する。だがインダス河以東の〈東洋〉はもは エント世界を西欧の思惟における不可欠の要素として取り込んだのはヘーゲルであった。オリエントは ており、その排除には西欧の形而上学的・神学的な背景がある、と摘出したのが丹生谷貴志である〔丹 こうした「抑圧/抵抗」という図式によって排除されるものがサイードの視点からは必然的に脱落し ただ永遠に反復して現れる静的な「非歴史」の領域に位置づけられる。

拠」を掘りくずしかねない脅威となる。だからこそ、これらの諸国を「歴史」(つまり西欧理性の弁証法)

史的

〈東洋〉

「根拠」を提供するならば、それ以東の「非歴史」の

はもはや「知」には属しえない。古代オリエント帝国(の専制)が西欧

〈東洋〉

はそうした西欧の

「歴史」の

の歴

映し鏡へと焼き直された過程である [柄谷 | 九九〇]。そしてまさにこの事例に照らせば、サイードの図 身も指摘している。オリエントの側からのオクシデンタリズムは倒立したオリエンタリズムに他ならず、 式が「東西の対立」という構図に依存していることもかえって明白になる。 によるオリエンタリズムの内在化が「大東亜共栄圏」、「近代の超克」、さらには「アジア主義」という そうした逆襲、 配に対抗すべくイスラーム/アラブ側の大義をもちだすことが問題の履き違いであることはサイード自 にこそ、かえって西欧の知の強化に加担していることに気づいていない。むろんオリエンタリズムの支 それゆえに二重の限界を露呈していることになる。まず、サイードは自分の西欧弾劾=否定の論理ゆえ サイードの『オリエンタリズム』は、端的にいってこのヘーゲルの図式に暗黙のうちに依存しており、 | 逆差別は「東西」間の単純な政治的覇権争いに退行する。日本でいえば、「脱亜入欧|

味するかにも気づいてはいない。 まり『オリエンタリズム』では不在の〈東洋〉――がみごとに排除されながら、彼はその排除が何を意 うこの構図そのものの有効性を自壊させ、西欧の知を内部から崩壊させるもう一つのオリエント―― その論理的帰結が第二の限界だ。つまりサイードの視点からは、支配 /被支配、 加害者/被害者とい

西欧の内なるオリエンタリズム批判

己オリエンタリズムとしての内部植民地化であり、いま一つは忘却された〈アジア〉をテコに知の可能 かくしてサイードの戦略は二つの局面を必然的に見落とすこととなった。一つは西欧内部における自

の外部へと排除し忘却することが、西欧の「知」を可能にするための前提条件となった。

みずからに招き寄せたフローベールのような小説家、 八七]。神学、法学、医学という西欧の高等教育が養成した専門職が、他ならぬ植民地政策においてそ の先兵となったのも偶然ではない、というわけである。そうした自己矛盾を体現し、 るもの」によって長期間にわたり植民地化された帰結にほかならないことである」と指摘 も重要な事実、それは西欧資本主義による世界の植民地化は、西欧自身が「ヨーロ 性と限界とを問い直す姿勢である。最初の点について関曠野は「本書でサイードがいいそこねている最 マックス・ヴェーバ ーのような学者の ッパ 的 認識論 II する[関 的 口 「病理」 ゴス な危機を 的な 一九

異文化理解の限界と可能性

対するサイードの批判は、

いささか皮相な揚げ足取りに終わっている〔姜 一九八七〕。

る「生きた」要素には無感覚なルイスの態度こそ問題とするサイードとの対立が浮かび上がる。 ながら最後まで英語圏の読者に英語で「心」の日本を語り続けたラフカディオ・ハーンとの対比も彷彿 実証主義日本学者チェンバレンの冷徹な日本観察と、 ルイスと、辞書編纂といった死んだ業績ばかりもちあげて、学問業績へと集積されることから排除され とが不可能な以上、 との論点にいたりつく。 二つめの視点は、結局他者の文化はどの程度まで解釈でき、また理解とはここで何を意味するのか、 あくまで学問という枠を尊重することが他者理解の前提として必要かつ有利とする 先のルイス/サイード論争にもどれば、 日本人作家小泉八雲となって西欧への退路を断ち ヒトの認識が先入観から自由になるこ 初期

おりからの

Ш

才

リエンタリズム論争で提起されたこのジレンマは、フランス圏では八〇年代を通じて、

としよう [平川 - 九八七]。

代アメリカ合衆国では、フェミニズムの大衆化、エスニシティ意識の先鋭化にともなって、むしろ性差。 をみ、離反と喪失によるパレスティナとの友愛を語るジャン・ジュネの遺作が話題となる。 マイノリティ、 民族の自己隔離=ゲットー化の傾向が昻進し、しょせん他者=よそ者(白人、入植者)には自分(=黒人 を決して共有できない他者の顔にこそかけがえなさの根拠を問うレヴィナスの哲学などが時ならぬ流行 どに遠ざかる理解不可能な他者にさらされた自己の喪失に賭けるセガレンのエクソティスム論や、痛み 移民労働者問題、イスラーム原理主義との共存の問いを背景に、思索の糧となった。ふれようとするほ 先住民) は理解できぬ、とする孤立感の内向化と、外への攻撃性が目立ってきた。 一方九〇年

その変容の軌跡を文化間翻訳の現場として生きること〔大塚|九九二〕。それがオリエンタリズムのかな 発見へと転倒 見方のほうが不可解になってくる、という。東洋の神秘の謎解きのはずが、終わってみると、 本が突拍子もない国であるという印象は徐々に薄れ、かわって、日本は不可解だとみている西欧読者の この本はことさらアメリカの場合と日本の場合とを対比させて分析を進めるが、読んでいくうちに、 クリフォード・ギアーツがある [Geertz 1988]。ルース・ベネディクトの著作『菊と刀』を再読した彼は 部からの眼差しはついに内部を理解できないのか。この問いに逆説的な返答をした一人に人類学者 論理の明晰さそのものへの疑問にすりかわる。他者性の探求の行き着くところが内なる他者性の つまり目的論としての歴史のかなたで、われわれの「知」を待つ底無しの誘惑ではないのだろう 主体と客体、 自己なるものを肯定/否定する地盤そのものをいったん捨象する契機となる。 内部と外部といった区別を前提とした「理解」過程そのものの枠組が自壊する、 かえって

か。

阿部良雄 引用文献

Berchet, Jean-Claude (éd.) 1985 Le voyage en Orient, Paris: Robert Laffon 一九九〇「オリエンタリズムとアカデミー絵画」『イメージの魅惑』小沢書店。

平川祐弘 Geertz, C 1988 Works and Lives, The Anthropologist as Author, Stanford University Press 一九八七『破られた友情』新潮社。

彌永信美 九八七『幻想の東洋――オリエンタリズムの系譜』青土社。

柄谷行人 彌永信美 一九九〇 九八八「問題としてのオリエンタリズム」『歴史という牢獄』 『終焉をめぐって』福武書店。

姜尚中 九八七「書評、エドワード・サイード『オリエンタリズム』」『思想』七五九号。

ルイス、バーナード 一九八三「オリエンタリズム論争」『みすず』(福島保夫訳)一月号、二月号。 黒田壽郎 一九八七「曖昧性の機能 または言説の力」『文化会議』二二二号。

大塚和夫 丹生谷貴志 一九九一 「実験的民族誌と『トゥハーミ』」、V・クラパンザーノ『精霊と結婚した男』 一九八七 [一九八五]「歴史の〈外部〉」『砂漠の小舟』筑摩書房。 紀伊國屋書店

Said, Edward [1978] サイード、エドワード 訳者解説。 紀子訳)平凡社。 一九八六『オリエンタリズム』(板垣雄三・杉田英明監修、

Schwab, Raymond 1950 La Renaissance orientale, Paris: Payot=1984, The Oriental Renaissance (translated by Gene Patterson-Black & Victor Reiking), New York: Columbia University Press

一九八七「学知・権力・植民地化」『週刊百科』二九一号、ついで『野蛮としてのイエ社会』 一九八七、所収。 御茶の水

鵜飼哲 一九九一「オリエンタリズム」『国文学』七月号。

編者紹介

山内昌之(やまうち まさゆき)

1947年牛まれ

現 在 東京大学教養学部教授

著 書 『現代のイスラム』

(朝日新聞社,1983 発展涂上国研究奨励賞)

『スルタンガリエフの夢』

(東京大学出版会、1987 サントリー学芸賞)

『瀕死のリヴァイアサン』

(TBSブリタニカ、1990 毎日出版文化賞)

『ラディカル・ヒストリー』(中央公論社, 1991 吉野作造賞)

『民族と国家』(岩波書店, 1993) ほか

大塚和夫(おおつか かずお)

1949年牛まれ

現 在 東京都立大学人文学部助教授

著 書 『異文化としてのイスラーム――社会人類学的視点から』

(同文舘, 1989 澁澤賞, アジア・太平洋賞・特別賞) ほか 訳 書 D.F. アイケルマン 【中東――人類学的考察】(岩波書店, 1988)

V. クラパンザーノ 『精霊と結婚した男――モロッコ人トゥ ハーミの肖像』(紀伊國屋書店, 1991 共訳) ほか

イスラームを学ぶ人のために

定価 1,950円 (本体1,893円・税57円)

1993年11月20日 初版発行

発行者 高島国男

世界思想社

本 社 京都市左京区岩倉東五田町77 電話(721)6506~7振替京都0-2908 東京支社 東京都千代田区猿楽町1-4-8

松村ビル

©1993 M. YAMAUCHI K. OHTSUKA Printed in Japan 落丁・乱丁本はお取替えいたします (共同印刷工業・

替えいたします (共同印刷工業・藤沢製本)

ISBN4-7907-0476-9